近世の文学

指導計画案

指導上の重点目標

【旅立ち】
1 作者と「おくのほそ道」について概要を理解する。
2 繰り返し音読し、俳文に特徴的な文体になじむ。
3 古典を下敷きにした名文を読み味わう。
4 作者の旅に対する考え方と旅に出る心境を理解する。

学習活動

導入

❶「おくのほそ道」について既習の知識や知っている芭蕉の句をあげる。
❷ 俳諧の歴史・作者・作品について学ぶ。知技

展開

❶「旅立ち」を音読する。思判表
❷ 教師の範読を聞きながら、独特のリズムがどのような表現から生じているか考える。本文から対句表現を探す。知技 →**「言葉と表現」1**
❸ 重要古語の意味・用法を確認する。知技 →**「言葉と表現」2**
❹ 古典の引用に注意しながら現代語訳する。知技 思判表
❺ 季語がもたらす意味合いに気をつけながら、発句を解釈し、作者の心情を理解する。思判表

指導上の留意点

❶「おくのほそ道」から幾つかの句をあげて知っているか聞いてみる。
❷「おくのほそ道」が単に旅の事実を記録したものでなく、作者が旅の文芸として、事実を潤色させて完成したものであることに注意させる。
❶ ゆっくり大きな声で音読させる。
❷ 対句表現がリズムを生み出していること、それぞれの対句がどのように対応しているか押さえさせる。
❸ 教科書巻末の一覧表などを使用し助詞の意味を識別できるよう指導する。
❹ 古典を下敷きにしている箇所は、少し丹念に解説する。特に冒頭では、李白の文章をどのように生かしているか考えさせる。
❺ 文章と発句がどう関わっているか、その妙をつかませる。

【平泉】

1　繰り返し音読し、緊張感のある文体を読み味わう。
2　省略や対句、古典を引用している部分を押さえながら、文章を正確に読み取る。
3　句に表現された作者の心情を理解する。
4　人の営みと自然の営為に対して作者がどのように考えていたか理解する。

まとめと発展	❶作者の旅に対する考えと旅立ちに際しての心境を本文に即してまとめる。思判表 主態 →「学習のポイント」1・「言語活動」1	❶文中の表現から作者が旅に命をかけようとしていたことをつかませる。作者の旅と人生に対する考え方についてどう思うか発表させるのもよい。
展開	❶藤原氏三代の歴史、義経との関わりについて学ぶ。知技 ❷「平泉」を音読をする。思判表 ❸重要古語の意味・用法を確認する。知技 →「言葉と表現」1 ❹省略されている言葉を補いながら、段落ごとに現代語訳する。知技 思判表 ❺杜甫の漢詩「春望」の内容を理解し、そのような古典の引用が作者の心情をどう引き出しているか考える。知技 思判表 ❻「夏草や」「卯の花に」の句に込められた作者の心情を理解する。思判表 →「学習のポイント」1 ❼作者が見た光堂・経堂の情景についてまとめ、時間の推移とともにどのような変化がみられたか話し合う。思判表 ❽「五月雨の」の句に表現された作者の心情を理解する。思判表	❶前の時間に課題として生徒に与えて、発表させてもよい。 ❷歯切れのよい文体がどこから来ているか、考えさせる。 ❸助詞の働きに注意を促す。 ❹平泉の各場所の位置関係、人間関係を押さえさせる。 ❺発展的な学習として「邯鄲の夢」の故事は辞書で生徒に調べさせたい。引用文が本文にそのまま流れ込んでいるので、古典のフレーズが作者の感慨をよりいっそう強めていることを理解させる。 ❻発句が文章とどのように関わっているか、また二つの句はどのように持ち味が違うか、生徒に意見を述べさせてもおもしろい。 ❼❽「曽良旅日記」から実際の旅の様子を紹介し「降り残してや」の表現が意味することを考えさせるとよい。
まとめと発展	❶「夏草や」「卯の花に」の句を詠む際に想起された歴史上の出来事について、それぞれ調べさせる。主態	❶資料集や図書館などを利用して、どのような歴史的な出来事が句の背景にあるのかを理解させ、芭蕉が句に

			込めた思いについて解釈する。
	導入	❶西行や「山家集」と芭蕉との関係、「源氏物語」の概要について学ぶ。知技	❶詩歌編の西行の歌（二六四ページ）なども参考にしながら、芭蕉の発句や紀行文に西行の「山家集」からの影響があることをつかませたい。
【種の浜】 1 種の浜を訪れた作者の感動を理解する。 2 寂しさや」「波の間や」の句を通し、作者が句に凝らした表現の効果への理解を深める。 3 作者が「ますほの小貝」を拾った理由について理解する。	展開	❶「種の浜」を音読する。思判表 ❷作者が種の浜に行った目的について読み取らせる。思判表 ❸「寂しさや」の句に込められた作者の心情を理解する。思判表　→**「学習のポイント」1** ❹「波の間や」の句に込められた表現の工夫、効果について話し合う。知技　→**「言葉と表現」1**	❶情景を味わいながら音読させる。 ❷本文中から該当箇所を指摘させる。 ❸教科書の脚注に示した和歌や「源氏物語」の引用部分を参考に、句が詠まれた背景にある文学作品について理解させる。 ❹句に表れる色彩感覚や情景について想像させ、解釈を深める。
【田舎に雅言の残れること】 1 内容を読み取り、作者の考えを理解させる。	まとめと発展	❶作者が「ますほの小貝」を拾おうとした理由について話し合わせる。主態　→**「言語活動」1**	❶作者にとって「ますほの小貝」拾うことがどのような意味を持つのかを話し合わせることで、作者が「おくのほそ道」の旅の目的について理解を深める。
	展開	❶全文を音読する。思判表 ❷重要古語の意味・用法を確認し、現代語訳する。知技　→**「言葉と表現」1・2** ❸全体を要約し、作者の言う「雅びたる言葉遣ひ」とはどういうものかを考える。思判表　→**「学習のポイント」1**	❶論の展開に注意して、ゆっくり音読させる。 ❷補うところを括弧内に入れさせるなどして、訳はできるだけ正確を期させる。 ❸「見ゆる」などのように、古代の形を残している語を「雅びたる」と言っていることを読み取らせる。

【単元の言語活動７　歴史を再発見し、随筆を書く】

1　古跡や伝統行事についての体験や知識をグループで話し合わせる。
2　生徒たちの話し合いによって、グループで扱う古跡や伝統行事を一つ選び、調べさせる。
3　調査の結果をまとめさせる。
4　調査の結果をもとにして、各自で随筆を書かせる。

❹ なぜ田舎には古語が残っているのか、また、それがどのように新しい言葉に置き換えられていくのかを考える。知技 主態

→「言語活動」1

❹ 都会で使っていることばなどを聞いて、その方が良いと思い古い言葉を捨ててしまうということは、現代日本語でも同様のことが起こっていることを考えさせる。

導入

1 古跡や伝統行事に関する体験談や知識について話し合う。知技

❶ グループを作り、旅行などで古跡を訪れたり、地域の伝統行事に参加したりしたときの体験について話し合う。

❷ 実体験以外にも、古跡や地域の伝統行事について知っている事例があれば、互いに教え合う。

❶ 調べる方法や手段は、生徒の主体性に任せ、インターネットなども活用させ、必ずその資料の正確性や性質を確認させる。
古跡の場合は、その場所で起きた歴史的な出来事や事件、現在の様子について調べる。
伝統行事の場合は、起源、現在までの継承の過程や方法などについて調べる。
古跡の保存や再現、伝統行事の継承事業に関わっている人からの聞き取り調査などを行ってもよい。

❷ 生徒の身近に伝統行事が残っていない場合もあると思われるので、必ずしも実体験にこだわらなくてもよい。

展開

2 古跡や伝統行事を一つ選び、グループで調査する。思判表

❶ グループで話し合った古跡や伝統行事の事例の中から一つを選び、その歴史的背景を調べる。

❷ 調査の成果をまとめる。

❷ 適宜写真なども使い、各自で随筆を書くための資料となるように、客観性を持たせる。

まとめと発展	
3 各自で、随筆を書く。思判表 主態 ❶ 2の調査をもとに下書きをする。 ❷ 推敲する。 ❸ 清書する。 ❹ 完成した文章をグループ内で読み合う。	❶ 調査したことをわかりやすくまとめる。最初から整った文章を書こうとするのではなく、箇条書きから始めてもよい。 なぜそのテーマを選んだのかが分かるように、動機やきっかけを書く。 調査の前と後で、どのように見方が変わったのかなどを書く。 ❷ タイトルを工夫する。読み手の興味を引くような言葉を選ぶ。倒置法、体言止めなどの修辞を用いてもよい。 文章の構成を工夫する。もっとも伝えたいことを文章のどこに配置するのが効果的かを考える。 文体を工夫する。ですます体か、である体か、自分の伝えたいことに合う文体を選ぶ。 ❸ 誤字脱字がないか、文体は一致しているか、確かめる。 全文を通読して、自分の伝えたいことが表現できているか、確かめる。 ❹ 文章表現に関してよかったと感じた点や、内容面について特に関心を持った点などを話し合う。